源氏日報

# いよいよ 歴史講座 始まる

## 予告

# 平家物語

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり
娑羅双樹の花の色盛者必衰の理をあらはす
奢れる人も久しからずただ春の夜の夢のごとし
猛き者も遂には滅びぬ偏に風の前の塵に同じ

遠く異朝をとぶらへば秦の趙高漢の王莽梁の朱忌唐の禄山
これらは皆旧主先皇の政にも従はず楽しみを極め
諫めをも思ひ入れず天下の乱れん事を悟らずして
民間の愁ふるところを知らざつしかば
久しからずして亡じにしし者どもなり

近く本朝をうかがうに
承平の将門天慶の純友康和の義親平治の信頼
これらは奢れる心も猛き事も
皆とりどりにこそありしかども近くは
六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と
申しし人のありさま
伝え承るこそ心もことばも及ばれね

毎６月から
毎月第3木曜日

現代風に訳すと・・
ベーンベーンベベーン

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常(全ての現象は刻々に変化して同じ状態ではないこと)を示す響きがある。

(釈迦入滅の時、枯れて白くなったという)沙羅双樹の花の色は、盛んな者も必ず衰えるという道理を表している。

権勢を誇っている人も長くは続かない、まるで春の夜のゆめのよう(にはかないもの)である。

勇ましく猛々しい者も結局は滅んでしまう、全く風の前の塵と同じである。

遠く中国にその例を尋ね求めると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱忌、唐の禄山、これらは皆もと仕えていた主君や先の皇帝の統治にも従わず、楽しみの限りを尽くし、他人の諫言をも心にとどめず、天下が乱れるであろうことを悟らないで、人民の嘆くところを理解しなかったので、まもなく、滅びてしまった者たちである。

近くわが国の例を調べてみると、承平の(平)将門、天慶の(藤原)純友、康和の(源)義親、平治の(藤原)信頼、これらは思い上がった心も猛々しいことも、皆それぞれはなはだしかったけれども、最近の例は、六波羅の入道こと前太政大臣平朝臣清盛公と申しあげた人の様子は、伝えお聞きするにつけても、心で想像することも言葉で表現することも出来ない程ひどいありさまである。ベベベン、ベーン

物語の冒頭部分は、清盛の栄達から始まります。

ここには清盛が船で熊野参詣に向かったところ、大きな鱸が船に飛び込んできたという逸話が載っています。清盛はこれを熊野権現の御利益(神仏からの恵み、霊験)と考え、精進潔斎(身を清め、肉・魚を食べない戒め)を破って家臣たちに食べさせます。すると、これ以降、平家には吉事が相次ぎ、清盛は瞬く間に太政大臣へと昇進したといいます。挿絵は、家臣が船中に飛び込んできた鱸を料理している場面。